【共同研究】

大学生とその父母の父親観・母親観・子ども観
－2001～2006年度収集データの分析－

登張　真稲*　本田　時雄**　保坂　亨***

Images of father, mother, and child of undergraduates and their mothers and fathers: Analysis of data collected from 2001 to 2006

Maine TOBARI, Tokio HONDA, Toru HOSAKA

Analyzed were data on undergraduates and their mothers and fathers concerning the respective evaluation of their own mothers and fathers as a parent, spouse, homemaker, career employee, and member of society, the degree they expected them to carry out those roles, and their own images of children. Images of the roles of married men and women are said to have greatly changed from traditional sex-typed roles to postmodern gender roles over the last thirty or forty years. Images of children are also said to have changed. The percentage of people who regard having children as a social norm have apparently decreased over the same period. This study first sought to examine whether these trends are borne out by data. In all three data, though, the highest scores for evaluation of one's father and mother were those for a career employee and a mother, which are traditional sex-typed roles. The highest scores of expectations for fathers and mothers were for them as parents. Undergraduates' scores of expectations for all roles were higher than their fathers' and mothers' scores. Thus, scores for evaluation of one's parents' roles and expectations of them did not reflect the above trend. Undergraduates' scores of the image of children as a social norm were lower than their fathers' and mothers'. This result appears to reflect the trend in changing images of children. This study also sought to examine the relationship among the scores for evaluation of parental roles and images of children. Results revealed that undergraduates' scores of the images of children were influenced by their parents' scores of equivalent scales and their own scores of evaluation of their fathers and mothers.

Key words: father's role, mother's role, image of children, comparison among generation, undergraduate.
父親の役割、母親の役割、子ども観、世代間比較、大学生

---

*　とばり　まいね　文教大学人間科学部
**　ほんだ　ときお　文教大学人間科学部臨床心理学科
***ほさか　とおる　千葉大学教育学部

問題と目的

日本には「男は外で働き、女は家庭の世話をする」という性役割分担に関する根強い考え方があるとされてきた（本田・ケァンズ, 1991）。この考えに賛成する者は、1979年には大多数であったが、2004年には反対者が賛成者を上回った（厚生労働省, 2006）。また、結婚した女性には妻、母親、主婦（家事担当者）としての役割が期待され、夫には職業人（家計担当者）としての役割が最も期待され（池田・田代, 1981）、1980年には男性雇用者と無職の専業主婦からなる世帯が妻も雇用者である共働き世帯を大きく上回っていた。しかし、年々前者は減少し、後者は増加し、1991年以降、両者の割合はほぼ同数となり、2005年では共働き世帯988万世帯に対し、片働き世帯は863万世帯となった（厚生労働省, 2006）。職業人としての役割をもつ妻が増えるのに従って、「夫も家事や育児を分担すべきである」という意見が増え（岡崎, 1990）、「男も女も、仕事も家事・育児も」というポスト近代的ジェンダー観が出現した（宮坂, 2001）。

職業以外の家庭外の活動の重要性も認識されるようになった。伝統的役割分業論を支持した女性も、その72%が「女性はできるだけ社会と結びついた活動をするほうがよい」と答えていた（田代, 1981）。男女にかかわらず、「社会の一員として社会のために役立ちたい」と考える人の割合は、1977年にはそのようなことをあまり考えない人をやや下回っていたが、1985年から1991年の間に大きく増加して60%を超えた（それ以後は大きな変化はない。厚生労働省, 2006）。

結婚によって生まれる子どもについての考え方も変化してきている。「子育ては社会的義務であり、子は自分の分身で、かつ生きがいである」という伝統的な価値意識は、大正生まれ、昭和一桁生まれ、昭和二桁生まれ、戦後生まれと世代が若くなるにつれて弱くなった（池田・田代, 1981）。1970年代前半には、「結婚したら必ず子どもを作る」という夫婦が圧倒的大多数であった（池田・田代, 1981）。しかし、現代では計画出産が一般的で、子は「授かる」ものというより「つくる」ものという意識が広まった。また、子どもの価値についても「社会のため、次世代を残すことはつとめ」という意識は薄れ、自分のため、自分にとっての価値があるかどうかを考えて、子どもを産むか否かを決定するように変化してきた（柏木, 2001）。結婚年齢は年々上昇し、結婚しても子どもを産まないことを選択する夫婦もいるし、結婚しない人も増えている（厚生労働省, 2003, 2006）。このように、夫や妻の役割についての考え方やその実態と子どもについての考え方は近年大きく変化している。

本田（2004）はこれらのことをふまえ、自分の父親の父親、夫、主夫、職業人、社会人としての評価と、自分の母親の母親、妻、主婦、職業人、社会人としての評価、父と母が果たす役割についての願望、自分自身の子ども観などを、大学生とその父母の３者に同一の項目で尋ねる質問紙調査を1995年からほぼ毎年春と秋に実施している。このデータについては、1997年と2000年に収集されたデータを用いて、子（大学生）と父と母の父親イメージと母親イメージ、子ども観についての分析が行われた（本田, 2004）。しかし、父親の夫、主夫、職業人、社会人としての評価と、母親の妻、主婦、職業人、社会人としての評価、および父母の果たす役割についての願望に関する分析は行われていない。

そこで本研究は、2001年から2006年度に収集された子（大学生）と父と母のデータについて、それぞれの父母の上記の役割も含めた役割に対する評価と願望、および子ども観に関する分析を行い、これらの変数の得点における調査実施時期と世代による違いについて検討することを目的とする。とくに、これらの違いが、父母の役割に関する見方と子ども観に関してみられるとされる、上に述べた近年の変化を反映しているかの検討を第１の目的とする。父と母や男女による違いについても検討する。

ところで、子（大学生）の子ども観には父母の子ども観が影響を与えているとともに、子ども自身の父や母の役割についての評価が関連しているのではないかと考えられる。そこで、第２の目的

として、子の子ども観に及ぼす父母の子ども観と、子ども自身の父母の役割についての評価の影響について検討する。

方法

調査時期と調査対象者

2001年秋　男子25、女子70、計95名。
2004年春　男子43、女子92、計135名。
2004年秋　男子30、女子47、計77名。
2005年春　男子44、女子90、計134名。
2005年秋　男子33、女子84、計117名。
2006年秋　男子25、女子75、計100名。
計　男子200名、女子458名、計658名。
内訳：B大学男子200名、女子435名、
　　W大学女子23名（2006年秋のみ）

手続き：大学生に、子ども用、父親用、母親用の３種の調査票が入った封筒を渡して、子ども用には自分で回答し、父親用と母親用については両親に回答してもらうよう依頼し、後日回収した。

尺度：１．自分の父親に対し、父親として、夫として、主夫として、職業人として、社会人として、自分の母親に対し、母親として、妻として、主婦として、職業人として、社会人としてどう評価するかについて、父親と母親に共通に用いることができる形容詞（Table ２参照）を用いて、それぞれ「そう思う」「少しそう思う」「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「そう思わない」の５件法で回答を求めた。このうち母の母親役割についての項目は、本田・大熊（1998）[脚注i]で用いられた母の母親像についての項目から作成されたものである。

２．自分の父親が父親、夫、主夫、職業人、社会人としての役割を果たしている（果たしていた）という項目と、それらの役割を果たして欲しい（欲しかった）という項目の計10項目、および自分の母親が母親、妻、主婦、職業人、社会人としての役割を果たしている（果たしていた）という項目と、それらの役割を果たして欲しい（欲しかった）という項目の計10項目に対して、それぞれ「そう思う」「少しそう思う」「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「そう思わない」の５件法で回答を求めた。

３．現在の（最終的な）父親と母親との関係について「良い関係である（だった）」「良い関係でない（なかった）「どちらともいえない」の３件法で回答を求めた。

４．女性の生活史研究会（1981）が作成した子どもの価値観に関する23項目の質問紙を参考にして本田（2004）が作成した子ども観についての29項目に対し、「そう思う」「少しそう思う」「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「そう思わない」の５件法で回答を求めた。

☆子（大学生）と父と母のデータは、同一のID番号で結合されたペアデータとなっている。

結果 [脚注ii]

１．調査対象者の人口学的変数と父母との現在の（最終的な）関係

調査対象者の大学生と父親と母親の人数と平均年齢、それぞれの父親と母親の種類（実父か、実母かなど）と一緒に過ごした年月、学歴、職業と、父親と母親との現在の（最終的な）関係についての結果をTable １にまとめた。現在の（または最終的な）父母との関係は良好であることが多かった。

２．父母の役割についての評価尺度の因子分析

自分の父親と母親に対する評価については、父（母）の父親（母親）としての評価についての10項目と「父親（母親）の役割を果たしている（果たしていた）」という項目の計11項目に対して、主因子法、バリマックス回転で最小の固有値＝１に指定した因子分析を子と父と母のデータで別々に行ったところ、２または３因子が抽出され、いずれのデータでも第１因子は「あたたかい」「信頼できる」「思いやりがある」「父（母）親の役割を果たしている（果たしていた）」「相談相手になる」「子育てに熱心」「あなたを信頼している」の７項目の負荷量が.４以上となった（寄与率31.80～38.74%）。「父（母）親の役割を果たしている（果たしていた）」を除く６項目は、父母に対する父親（母親）としての評価についての10項目の因

Table 1　子(大学生)と父と母の人口学的統計と父母との関係

	子（大学生）	父	母
人数	658名	646名	650名
平均年齢	21.14歳	51.96歳	49.14歳
父親　実父	97.0%	92.4%	93.5%
父との生活18年以上	91.6%	85.9%	90.5%
旧制中学・高校卒等	2.2%	29.7%	32.2%
大学卒	72.0%	9.8%	10.5%
農業など		22.9%	22.8%
父との関係　よい関係	69.7%	61.1%	67.2%
悪い関係	6.5%	6.1%	3.6%
母親　実母	97.2%	93.3%	95.0%
母との生活18年以上	96.5%	90.6%	93.1%
高校・旧制高等女子高など	4.2%	20.8%	21.8%
大学卒	69.0%	1.9%	1.3%
専業主婦		44.2%	41.2%
母との関係　よい関係	83.8%	70.8%	67.2%
悪い関係	1.3%	2.1%	3.6%

注）子（大学生）のデータには、父と母の職業についての項目が含まれていない。

子分析（本田, 2004）により抽出された「慈父」「慈母」因子の負荷量が.4 以上だった項目と一致している。本田・大熊（1998）で実施された娘の母親像の因子分析で「肝っ玉母さん」因子の負荷量が.4 以上だった項目とも一致している[脚注iii]。父親と母親の役割評価に関する上記の 7 項目について、子と父と母のデータでそれぞれ信頼性分析を行うと、α 係数はすべて.8 以上で、部分全体相関もすべて.5 以上であった。そこで、第 1 因子の負荷量が.4 以上の 7 項目から父の父親役割評価と母の母親役割評価についての尺度を作成した。しかし、第 2 因子や第 3 因子の負荷量が.4 以上の項目について信頼性分析を行うと、α 係数はすべて.6 未満となった。したがって、第 2 因子、第 3 因子をもとにした尺度は作成しない。

父（母）の夫（妻）としての評価についての 8 項目と「夫（妻）の役割を果たしている（果たしていた）」という項目の計 9 項目についても、主因子法、バリマックス回転で最小の固有値＝1 に指定した因子分析を子と父と母のデータで別々に行ったところ、2 または 3 因子が抽出され、いずれのデータでも第 1 因子は「思いやりがある」「あたたかい」「相談相手になる」「夫（妻）の役割を果たしている（果たしていた）」「妻（夫）に信頼されている」「妻（夫）を信頼している」の 6 項目の負荷量が.4 以上であった（寄与率39.91～45.60%）。「頼っている」は、母の妻役割評価についての第 1 因子の負荷量は子、父、母のいずれのデータでも.4 以上であったが、父と母のデータでは第 2 因子の負荷量も.4 以上で、父の夫役割評価についての第 1 因子の負荷量は子、父、母のいずれのデータでも.4 未満であった。なお、「頼っている」を含めない 6 項目について信頼性分析を行うと、α 係数はすべて.9 以上で、「頼っている」を含めた場合の α 係数とほとんど変わらなかった。そこで、「頼っている」を含めない 6

Table 2　父親の役割評価、母親の役割評価尺度の項目とα係数

父についての尺度	母についての尺度	項目
父の父親役割評価	母の母親役割評価	あたたかい
α係数	α係数	信頼できる
子.894	子.846	思いやりがある
父.899	父.886	父親(母親)の役割を果たしている
母.897	母.898	相談相手になる
		子育てに熱心
		あなたを信頼している
父の夫役割評価	母の妻役割評価	思いやりがある
α係数	α係数	あたたかい
子.928	子.914	相談相手になる
父.925	父.913	夫(妻)の役割を果たしている
母.916	母.912	妻(夫)に信頼されている
		妻(夫)を信頼している
父の主夫役割評価	母の主婦役割評価	家庭的である
α係数	α係数	気配りをしている
子.879	子.819	主夫(主婦)の役割を果たしている
父.827	父.833	合理的である
母.804	母.802	
父の職業人役割評価	母の職業人役割評価	責任感がある
α係数	α係数	有能だ
子.830	子.855	仕事に打ち込んでいる
父.889	父.884	職業人の役割を果たしている
母.875	母.870	幸福だ
父の社会人役割評価	母の社会人役割評価	地域活動に参加している
α係数	α係数	ボランティア活動に関心がある
子.766	子.759	近所づきあいがよい
父.807	父.807	社会人の役割を果たしている
母.816	母.831	社会的出来事に関心がある

注）父（母）の父親（母親）役割評価尺度に含めなかった項目：あなたに頼っている、
しつけが厳しい、服従的、あなたを私物化している
父（母）の夫（妻）役割評価尺度に含めなかった項目：頼っている、妻（夫）に従っている、
妻（夫）を従わせている
各尺度に示した項目は、子（大学生）の父に対する尺度で負荷量が高かった順に示している。

Table 3 父母の役割評価尺度と願望得点、願望－現実得点の３要因混合計画分散分析・効果の検定

尺度	性別 F	世代 F	世代×性別F	役割 F	役割×性別F	世代×役割F	世代×役割×性別F
父の役割評価	1.490	0.126	2.770	633.282***	1.726	3.222**	2.478*
母の役割評価	1.896	2.800	3.761*	163.597***	1.886	4.850***	2.064*
父役割願望	1.235	90.284***	0.917	109.336***	0.153	4.733***	1.475
母役割願望	0.023	65.754***	2.296	166.583***	1.907	6.364***	1.319
父願望－現実	4.309*	42.666***	0.890	238.975***	1.447	3.980***	4.039***
母願望－現実	0.005	24.745***	1.567	17.642***	0.324	7.041***	0.545

注）性別要因は被験者間要因、その他は被験者内要因　　***$p<.001$　**$p<.01$　*$p<.05$
球面性検定結果は、評価得点と願望得点では、世代は有意でなく、父（母）の役割は有意であった。願望－現実得点では、世代も父母の役割も有意だった。有意でない場合は球面性を仮定した検定結果、有意な場合はGreenhouse-Geisserの検定結果を用いた。自由度は省略した。

項目から父の夫役割評価と母の妻役割評価についての尺度を作成した。第２因子、第３因子の負荷量.４以上の項目から作成できる尺度のα係数は、母の妻役割についての１尺度（α＝.665）を除くと、すべて.６未満であった。したがって、第２因子､第３因子をもとにした尺度は作成しない。

父（母）の主夫（主婦）としての評価についての３項目と「主夫（主婦）の役割を果たしている（果たしていた）」という項目の計４項目､父（母）の職業人としての評価についての４項目と「職業人としての役割を果たしている（果たしていた）」という項目の計５項目、父（母）の社会人としての評価についての４項目と「社会人としての役割を果たしている（果たしていた）」という項目の計５項目についても、主因子法で最小の固有値＝１に指定した因子分析を子と父と母のデータで別々に行ったところ､いずれも１因子が抽出され、いずれのデータでもどの項目も因子負荷量は.４以上となった（寄与率52.75～64.70%, 51.59～63.59%, 39.33～50.20%）。信頼性分析の結果も考慮し、それぞれ４項目の父（母）の主夫（主婦）役割評価、５項目の父（母）の職業人役割評価、５項目の父（母）の社会人役割評価についての尺度を作成した。父母のそれぞれ５つの役割評価についての尺度は１つずつしか作成されず、どの尺度にも「その役割を果たしている（果たしていた）」という項目が含まれているため、役割名を強調し､父（母）の父親（母親）役割評価尺度、父（母）の夫（妻）役割評価尺度、父（母）の主夫（主婦）役割評価尺度、父（母）の職業人評価役割尺度、父（母）の社会人役割評価尺度と命名した。Table ２に父母の役割評価に関する10尺度の項目とα係数を示した。

３．父母の役割に関する変数の分散分析と平均値の比較

父と母のそれぞれの役割を果たして欲しい（欲しかった）という内容の項目の得点を願望得点とし、この願望得点からそれぞれの役割を果たしているという内容の項目の得点を引いた値を願望－現実得点とした。父母の役割評価に関する上記の10尺度の得点とそれぞれの役割についての願望得点および願望－現実得点について、データ収集時期を要因とする一元配置分散分析を行うと、母の主婦役割評価尺度の父親の得点と母の職業人役割評価尺度の母親の得点、および母の妻役割についての子の願望得点、母の主婦役割についての子の願望－現実得点は主効果が有意であった（$p<.05$）。しかし、多重比較で有意な差は、母の妻役割についての子の願望得点と母の主婦役割についての子の願望－現実得点で、2001年秋と2005年秋の間でみられたのみであった（$p<.05$）。他の尺度の得点で、主効果が有意なものはない。また、どの尺度も年々高くなる、または年々低く

Table 4 父母の役割評価尺度の得点範囲 1-5 に換算した世代込みおよび世代別の役割別得点と父母の役割願望および願望－現実の世代込み・役割別の得点の比較

尺度	父親(母親)役割	夫(妻)役割	主夫(主婦)役割	職業人役割	社会人役割	多重比較
父の役割評価	3.802	3.787	3.071	4.286	3.533	職業人＞父親＝夫＞社会人＞主夫
母の役割評価	4.252	4.050	4.119	3.879	3.671	母親＞主婦＞妻＞職業人＞社会人
子の父の役割評価	3.746	3.797	3.018	4.260	3.449	職業人＞夫＞父親＞社会人＞主夫
父の父の役割評価	3.763	3.731	3.101	4.242	3.533	職業人＞父親＝夫＞社会人＞主夫
母の父の役割評価	3.875	3.782	3.051	4.326	3.612	職業人＞父親＞夫＞社会人＞主夫
子の母の役割評価	4.319	4.014	4.236	3.893	3.636	母親＞主婦＞妻＞職業人＞社会人
父の母の役割評価	4.207	4.018	4.016	3.787	3.539	母親＞主婦＝妻＞職業人＞社会人
母の母の役割評価	4.242	4.045	4.075	3.929	3.756	母親＞主婦＝妻＞職業人＞社会人
父の役割願望	3.764	3.708	3.232	3.551	3.547	父親＞夫＞職業人＝社会人＞主夫
母の役割願望	3.677	3.531	3.564	3.082	3.262	母親＞主婦＝妻＞社会人＞職業人
父の役割願望－現実	−0.361	−0.120	0.166	−0.948	−0.684	主夫＞夫＞父親＞社会人＞職業人
母の役割願望－現実	−0.850	−0.755	−0.850	−0.680	−0.596	社会人＞職業人＝妻＞母親＝主婦

注）＞：$p<.05$で差が有意。＝：$p>.05$で差が有意でない。

なるといった一貫した傾向はみられなかった。したがって、本研究ではこれらの尺度については６年分のデータを一まとめにして分析する。

次に、父と母の役割に関する評価得点（得点範囲１－５に換算）と願望得点、および願望－現実得点について、性別を被験者間要因、世代（子と父と母の３水準）と役割（５水準）を被験者内要因とする３要因混合計画の分散分析を、父に関する得点と母に関する得点に分けて行った。Table ３に、２×３種類の３要因混合計画の分散分析における被験者間および被験者内効果の検定結果を示した。

父の役割評価と母の役割評価の尺度では、役割の主効果と世代×役割、および世代×役割×性別の交互作用は有意で、世代×性別の交互作用は母の役割のみ有意であった。父と母の役割願望得点、および父と母の願望－現実得点では、世代と役割の主効果と世代×役割の交互作用が有意であった。父と母の願望－現実得点では、性別の主効果と世代×役割×性別の交互作用も、父の役割のみ有意である。Table ４に、父母の役割評価尺度の世代込みと世代別の役割別得点と、父母の役割願望および願望－現実の世代込みの役割別得点、ならびに役割による多重比較の結果を示した。なお、母の職業人役割評価尺度の項目に回答した父と母の度数は、その他の尺度についての度数の89～92%で、やや低い傾向がみられた。

父の役割評価得点は、職業人役割が最も高く、次に父親役割と夫役割が高く、４番目が社会人役割で、主夫役割が最も低かった。世代別の分散分析も行い、子のデータのみで比較すると、夫役割が父親役割より高く、父のデータでは両者に有意差はなく、母のデータでは父親役割が夫役割より高かった。母の役割得点は、母親役割が最も高く、次が主婦役割で、その次は妻、職業人、社会人の順であった。主婦役割と妻役割の得点は、父と母のデータでは有意差がみられなかった。なお、父の役割評価の５役割の平均値は、子と父と母の得点間に有意差はみられない（M=3.683, 3.701, 3.704）。母の役割評価の５役割の平均値は子の得点が父の得点より高く（M=4.043, 3.949；$p<.05$）、母の得点（M=3.991）との間に有意差

Table 5　子と父と母の子ども観尺度の項目の因子負荷量と寄与率とα係数

項目	因子負荷量		
	子3-1	父3-1	母2-1
男性は父親になって完成される	.777H	.792H	.675
女性は母親になって完成される	.740H	.792H	.668
子どもがいて初めて社会的に家庭といえる	.656H	.674H	.702
子どもを産んで育てるのは女性のつとめ	.618H	.517H	.599H
人生で大事なことは子どもを育てて初めて経験	.586H	.649H	.687H
子どもを作るのは結婚の重要な意義のひとつ	.554H	.545H	.667H
夫婦が子どもをほしいと思うのは当然	.510H	.479H	.402H
子どもを産み育てるのは社会に対する義務	.457H	.536H	.555H
子どもを残すことで自分が生きた証拠を残せる	.404	.443	.570
夫婦にとって子どもができるのは自然	.395	.392H	.377H
子どもがいると死後も自己の分身が生き続ける	.375	.363	.498
子どもの存在により自分の位置が定まる	.351	.459H	.585
寄与率(%)	15.095	15.934	18.749
α係数	.855	.879	.881
項目	子3-2	父親3-2	母親2-2
子どもは夫婦の結びつきを一層強める	.637H	.631H	.581
子どもが自分を必要だと感じると生きがい	.621H	.562H	.533H
子どもを育てることも自己の成長につながる	.588H	.582H	.516H
人間である以上自分の子どもをもってみたい	.565H	.515	.392H
子どもの成長こそ最大の喜び	.552	.523H	.517
子どもがほめられると自分もほめられた気	.540H	.525H	.364H
子どもがいると夫婦の危機が救われる	.514H	.554H	.343H
子どもがいることは大きな張合い	.448H	.691H	.659H
寄与率(%)	12.489	13.492	10.467
α係数	.799	.830	.784
項目	子3-3	父3-3	母4-4
子どもがいると自分の自由な行動が制限	.682H	.548H	.644H
子どもの世話は精神的・肉体的に疲れる	.632H	.539H	.629H
子どもは夫婦の間に問題を起こす	.439H	.428H	.473H
寄与率(%)	5.132	5.366	4.373
α係数	.602	.618	.614

注）主因子法　バリマックス回転　H：本田(2004)の1997年データの因子分析で、社会規範としての子、生甲斐としての子、お荷物としての子因子の負荷量が.4以上だった項目
3-1　因子数=3に指定した因子分析で抽出された第1因子
4-4　因子数=4に指定した因子分析で抽出された第4因子

Table 6　子ども観尺度 (得点範囲 1-5 に換算) の 3 要因混合計画分散分析・効果の検定

性別 $F(1,557)$	世代 $F(2,1114)$	世代×性別 $F(2,1114)$	子ども観 $F(1.54,859.35)$	子ども観×性別 $F(1.54,859.35)$	世代×子ども観 $F(3.16,1759.48)$	世代×子ども観×性別 $F(3.16,1759.48)$
0.169	5.002**	0.261	826.939***	0.057	110.062***	1.631

注）性別要因は被験者間要因、その他は被験者内要因　　***$p<.001$　**$p<.01$
球面性検定の結果は、世代は有意でなく、子ども観は有意だったため、世代については球面性を仮定した検定結果、
子ども観および子ども観×世代についてはGreenhouse-Geisserの検定結果を用いた

はみられない。また、父母の役割を合わせた役割を10水準とする分散分析も行い、父と母の役割評価得点の比較も行ったところ、親役割と夫（妻）役割、主夫（主婦）役割、社会人役割は母の役割評価の得点が父の役割評価の得点より高く、職業人役割の得点は、父の役割評価の得点が母の役割評価の得点より高かった（$p<.05$）。

父の役割願望の得点は、父親役割が最も高く、次が夫役割で、その次が職業人、社会人で、主夫役割が最も低かった（Table 4）。子と母のデータでは父親役割と夫役割の間には有意差はみられない。母の役割願望の得点は、母親役割が最も高く、次が主婦役割と妻役割で、その次が社会人役割で、職業人役割が最も低かった。なお、父母の役割についての願望得点の５役割の平均値は子の得点（M=4.024, 3.860）が最も高く、次が母の得点（M=3.402, 3.273）で、父の得点（M=3.256, 3.136）が最も低かった（子と母の差：$p<.001$；母と父の差；$p<.05$）。

父の役割についての願望－現実得点は、主夫、夫、父親、社会人、職業人の順であった（Table 4）。また、子の父の父親役割、夫役割と主夫役割の得点と母の父の主夫役割の得点は正であったが、その他の得点はすべて負であった（願望の得点のほうが現実の得点より低い）。母の役割についての願望－現実得点はすべて負で、社会人役割が最も高く、次が職業人役割と妻役割で、母親役割と主婦役割が最も低かった。なお、願望－現実得点の５役割の平均値は、子の得点（M=.037,－.419）が父（M=－.685,－.924）と母の得点（M=－.521,－.896）より高かった（$p<.001$）。父と母の得点の間には有意差はみられない。

父母の役割評価と役割願望、願望－現実の子の得点については、男女の得点差の検定（独立したサンプルのt検定）も行ったところ、父の夫役割評価と主夫役割評価の得点は男子（M=3.923, 3.210）が女子（M=3.733, 2.932）より高く（$p<.05$）、父の夫役割願望と主夫役割願望、および母の社会人役割願望の得点は女子（M=4.203, 3.716, 3.785）が男子（M=4.015, 3.510, 3.487）より高く（$p<.05$）、父の父親役割と夫役割と主夫役割の願望－現実得点は女子（M=.189, .475, .824）が男子（M=－.232, .096, .330）より高かった（$p<.01$）。

４．子ども観尺度の因子分析

子ども観の29項目については、子と父と母のデータでそれぞれ主因子法、バリマックス回転で因子分析を行った。因子数を５以上にすると、子と父と母のデータで共通の内容の因子が抽出されないため、因子数＝２、３、４に指定した分析を行ったところ、因子数を３に指定すると、子と父のデータでほぼ同一の内容の３因子が抽出された。母のデータを因子数＝２に指定して因子分析すると、子と父のそれぞれのデータによる因子分析で抽出された第１因子と第２因子とほぼ同一の内容の２因子が抽出された。子と父の因子分析で抽出された第３因子とほぼ同一の内容の因子は、因子数＝４に指定した母のデータによる因子分析の第４因子として抽出された。信頼性分析の結果も考慮し、これらの３因子の負荷量が子、父、母のデータによる因子分析でともに.34以上の項目から、12項目の社会規範としての子ども観尺度と８項目の生きがいとしての子ども観尺度、３項目のお荷物としての子ども観尺度を作成した。Table 5にこれらの３尺度の項目と因子負荷量、寄与率と尺度のα係数を示した。社会規範としての子ども観因子は池田・田代（1981）の「社会

Table 7　子ども観３尺度の得点範囲 1-5 に換算した尺度得点の世代ごとと世代間の比較

回答者	平均値				多重比較
	社会規範としての子ども観	生きがいとしての子ども観	お荷物としての子ども観	計	
全体	3.223	4.157	3.012	3.464	生きがい＞社会規範＞お荷物
子	2.917	4.185	3.371	3.491	生きがい＞お荷物＞社会規範
父	3.437	4.115	2.646	3.407	生きがい＞社会規範＞お荷物
母	3.315	4.161	3.005	3.495	生きがい＞社会規範＞お荷物
世代間の比較	父＞母＞子	子＝母＝父	子＞母＞父	母＝子＞父	

注）＞：$p<.05$で差が有意。　＝：$p>.05$で差が有意でない。

的規範としての子育て」因子と「自己の分身としての子」因子を合わせた内容、本田（2004）の「社会規範としての子」因子と「自然的・社会的存在としての子」「分身としての子」「自己完成としての子」を合わせた内容の因子である。生きがいとしての子ども観因子は、池田・田代（1981）と本田（2004）の「生きがいとしての子」因子、お荷物としての子ども観因子は、池田・田代（1981）の「“かせ”としての子」と本田（2004）の「お荷物としての子」因子とほぼ対応している。

子ども観の３尺度についても、データ収集時期を要因とする分散分析を行ったが、データ収集時期の効果は有意とならなかったため、６年分を一まとめとして分析する。Table ６には、子ども観３尺度（得点範囲を１－５にそろえた）について行った、性別を被験者間要因、世代と子ども観因子を被験者内要因とする３要因混合計画の分散分析の効果の検定結果を示した。世代と子ども観因子の主効果と世代×子ども観因子の交互作用は有意であった。

Table ７に子ども観３尺度の世代込みと世代別の得点と多重比較の結果を示した。それによると、子、父、母の３データともに生きがいとしての子ども観の得点が最も高く、子のデータではお荷物としての子ども観が社会規範としての子ども観より高く、父と母のデータでは社会規範としての子ども観がお荷物としての子ども観より高かった（$p<.001$）。下位尺度別に世代の得点を比較すると、社会規範としての子ども観は、父が最も高く、次が母で、子が最も低かった（$p<.01$）。生きがいとしての子ども観は、子と父と母で差はみられなかった。お荷物としての子ども観は、子が最も高く、次が母で、父が最も低かった（$p<.01$）。なお、子ども観３尺度の子の得点についての男女差の検定も行ったが、３尺度とも有意差はみられなかった。

５．子の子ども観に父母の子ども観と子ども自身の父母の役割評価が与える影響

父母の役割評価得点と子ども観の得点間の関係については、子の子ども観は父と母の子ども観による影響を受けるとともに、子ども自身の父と母の役割に対する評価とも関連していると考えられる。そこで、その関係を検討するため子の子ども観下位尺度を目的変数、父と母の子ども観当該下位尺度と子の父親の役割評価、母親の役割評価下位尺度を説明変数とする重回帰分析（ステップワイズ法）を行った。Table ８に示すとおり、子の社会規範としての子ども観得点は、父と母の社会規範としての子ども観得点と、子の父の主夫役割評価と母の母親役割評価の得点によって有意に予測された。また、子の生きがいとしての子ども観得点は、父と母の生きがいとしての子ども観得点と、子の母の母親役割評価、妻役割評価、社会人役割評価得点によって有意に予測された。子のお荷物としての子ども観得点は、父と母のお荷物としての子ども観得点と子の父の父親役割評価の得点によって有意に予測された。なお、子の父の父親役割評価得点のβ係数は負であった。

Table8　子の子ども観尺度の下位尺度を目的変数、父と母の子ども観の当該下位尺度と子の父の役割評価、子の母の役割評価下位尺度を説明変数とする重回帰分析

目的変数	説明変数	標準化係数(β)	R2乗
子の社会規範としての子ども観	母の社会規範としての子ども観	.190***	.110***
	子の父の主夫役割評価	.167***	
	子の母の母親役割評価	.127**	
	父の社会規範としての子ども観	.092*	
子の生きがいとしての子ども観	子の母の母親役割評価	.231***	.160***
	父の生きがいとしての子ども観	.119**	
	母の生きがいとしての子ども観	.106**	
	子の母の社会人役割評価	.094*	
	子の母の妻役割評価	.088*	
子のお荷物としての子ども観	母のお荷物としての子ども観	.142**	.069***
	子の父の父親役割評価	−.148***	
	父のお荷物としての子ども観	.124**	

***$p<.001$　**$p<.01$　*$p<.05$

考察

1．父母の役割評価と子ども観の尺度

本研究では、自分の父母の役割に関する評価と自分の子ども観についての共通の質問項目への子と父と母の回答結果の因子分析をもとに、父（母）の父親（母親）役割評価、夫（妻）役割評価、主夫（主婦）役割評価、職業人役割評価、社会人役割評価尺度と、社会規範としての子ども観、生きがいとしての子ども観、お荷物としての子ども観尺度を作成し、役割ごとの得点と子ども観ごとの得点、および子と父と母の得点を比較した。父（母）の父親（母親）役割評価尺度に含まれた項目は、本田（2004）で抽出された「慈父」「慈母」因子、本田・大熊（1998）で抽出された「肝っ玉母さん」因子の内容と対応していた。父親と母親のイメージには、このような内容が含まれるのであろう。夫（妻）役割評価、主夫（主婦）役割評価、職業人役割評価、社会人役割評価尺度に含まれる項目も、それぞれの役割のイメージを示していると考えられる。

2．父母の役割評価、役割願望と性役割観の変化との関連性

伝統的な性役割観では、夫は家計担当者（職業人役割）、妻は母親、妻、主婦（家事担当者）の役割が期待される。したがって、父の職業人役割と母の母親役割、妻役割、主婦役割は伝統的性役割と合致した役割である。一方、父の父親役割と主夫役割、母の職業人役割は、男女平等と機会均等を重視した新しい役割観（ポスト近代的ジェンダー観）に合致した役割といえる。夫の家庭への関与には妻への情緒的支援も含まれている（平山, 2001）。本研究の父の夫役割評価尺度は、妻への思いやりなどを内容としているから、新しい性役割観に合致した役割についての評価を測定しているといえる。また、結婚した男女の役割として、家庭や職場での役割だけでなく、近隣社会やさらに広い社会における役割にも目が向けられるようになった。社会人としての役割は、夫や妻の役割として、性にかかわりなく新たに注目されるようになった役割である。時代とともに、世代とともに伝統的な性役割観から新たな役割観への変化が

みられるとしたら、父の職業人役割と母の母親、妻、主婦役割を重視する傾向は年々、また世代とともに低くなり、父の父親、夫、主夫、社会人役割、母の職業人、社会人役割を重視する傾向は年々、また世代とともに高くなると考えられる。本研究で測定された自分の父母のそれぞれの役割についての評価得点と、それぞれの役割について父母に果たして欲しい（欲しかった）という内容の願望得点には、既婚の男女の役割についての考え方が影響を与えていると考えられる。つまり、以前よりも重視されなくなった役割についての父母に対する評価得点と願望得点は年々、また世代とともに低くなり、以前よりも重視されるようになった役割についての父母に対する評価得点と願望得点は年々、また世代とともに高くなる可能性がある。

しかし、父母のどの役割についての評価得点も願望得点も、データ収集時期による違いはみられなかった。また、以前よりも重視されるようになったと考えられる父の主夫役割や母の職業人役割等の子の評価得点が父や母の評価得点より高いという傾向や、以前よりも重視されなくなったと考えられる母の母親役割や主婦役割等の子の評価得点が、父母の評価得点よりも低いという傾向はみられなかった（Table 4）。父母の役割についての評価得点は、子、父、母のいずれのデータでも伝統的な性役割観に合致した役割の得点が高く、新しい性役割観に合致する役割の得点は低い傾向が見られた。父母の役割についての願望得点は、父に対しては父親役割、母に対しては母親役割の得点が高く、職業人役割の得点は相対的に低い傾向が見られた。自分の親に対しては親としての役割を最も期待する傾向があることが明らかとなった。また、願望得点は、どの役割の得点も子の得点が父母の得点より高かった。データ収集時期による違いがみられなかったのは、性役割観の変化が最も顕著だったのは1980年代で、2002年以後は大きな変化はないため（厚生労働省, 2006）とも考えられるが、父母の役割に対する評価得点と願望得点の世代による違いは、いずれも既婚男女の役割についての見方の変化を反映していなかった。父と母の回答傾向にも大きな違いはみられなかった。

この結果は、自分の父母の役割に関する評価や願望には、既婚男女の役割についての見方以外の要因が作用することを示唆している。既婚男女の役割についての見方は、主として配偶者に対する期待や自分の役割に対する感情や考えを示すものであるのかもしれない。父母に自分自身や配偶者の役割についての評価や願望を尋ねていたら、異なる結果が生じた可能性がある。また、子の父母は通例、父親（母親）、夫（妻）、主夫（主婦）、職業人、社会人の役割を現在も果たしているのに対し、父母の父母は通例、それらの役割をかつて果たしていたという違いもある。父母の願望得点が子の願望得点より低かったのは、すでにそれらの役割を果たし終わった自分の父母に対し、多くを求める気持ちにはならなかったためではないかと考えられる。父母のデータでは、大部分の役割についての願望得点は現実得点より低かったことも、この解釈を支持しているといえる。

なお、子（大学生）の中で男子と女子の得点を比較すると、父の夫役割と主夫役割の評価得点は、女子が男子より低く、女子はこの役割についての願望得点と願望－現実得点が高いことが明らかとなった。若い世代の女性は、既婚男性に夫役割と主夫役割を期待する傾向にあることが確認された。願望が高いために、評価が厳しくなったとも考えられる。女子は男子より、母に社会人役割を期待する傾向もみられた。

３．世代による子ども観の違い

子ども観については、子を社会規範として見る見方から個人的価値を重視する見方への変化が示唆されている（池田・田代, 1981; 柏木, 2001）。子ども観尺度得点にもデータ収集時期による違いはみられなかったが、社会規範としての子ども観の得点は子の得点が父母の得点より低く、世代とともに子を社会規範として見る見方が減少することは、本研究の結果からも確認された。また、子をお荷物として見る見方は、若い世代のほうが顕著であることが明らかとなった。これらの傾向は近年の少子化傾向と関連があると考えられる。なお、生きがいとして子どもを見る見方には世代による違いはみられなかった。

４．子ども観と父母の役割評価との関係

子ども観下位尺度の子と父と母の得点と父母の役割評価の子の得点との関係についての結果から、子の子ども観には、父と母の子ども観が影響を与えていることが明らかとなった。さらに、子が父の主夫役割と母の母親役割を評価することは子の社会規範としての子ども観に、子が母の母親役割、社会人役割、妻役割を評価することは子の生きがいとしての子ども観に影響を与えること、また、父の父親役割への評価が高いと、子をお荷物とする見方は少なくなることが示唆された。子が父母の役割をどう評価しているかということは、子の子ども観に影響を及ぼしたといえる。

５．まとめ

自分の父母が果たしている役割については、伝統的な性役割に合致する役割への評価が最も高く、父母に最も果たして欲しい役割は親としての役割である傾向が、大学生とその父母の３群に共通してみられた。したがって、近年みられるとされる性役割観の変化は、本研究のデータにはほとんど反映されなかったといえる。なお、父母が自分の親の役割に対してもつ願望は、大学生に比べ、低い傾向がみられた。

一方、子ども観のうち、社会規範としての子ども観は、父母が子より高く、お荷物としての子ども観は、子が父母より高く、近年みられるとされる子ども観の変化は、データにより確認された。また、子の子ども観には、親の子ども観と、父母の役割に対する子の評価が関連していた。

［引用文献］

平山聡子　2001　中学生の精神的健康とその父親の家庭関与との関連：父母評定の一致度からの検討　発達心理学研究, **12**, 99-109.

本田時雄　2004　大学生とその父母の子ども観および父親・母親イメージの時代推移　文教大学人間科学研究, **26**, 87-93.

本田時雄・ロバート B. ケァンズ　1991　文化的文脈における日本の子供たち　文教大学生活科学研究, **13**, 1 -15.

本田時雄・大熊保彦　1998　ペアデータの分析の試み（１）：母と娘の場合　文教大学人間科学研究, **20**, 113-122.

池田政子・田代俊子　1981　夫・子・老親と女性　女性の生活史研究会編　いま女性は　福村出版　Pp.77-116.

女性の生活史研究会編　1981　いま女性は　福村出版

柏木惠子　2001　子どもという価値　中央公論新社

厚生労働省編　2003　厚生労働白書（平成15年版）　ぎょうせい

厚生労働省編　2006　厚生労働白書（平成18年版）　ぎょうせい

宮坂靖子　2001　ポスト近代的ジェンダーと共同育児　根が山光一編著　母性と父性の人間科学　コロナ社　Pp.106-134.

岡崎陽一　1990　家族のゆくえ　東京大学出版会

田代俊子　1981　女性の社会的活動　女性の生活史研究会編　いま女性は　福村出版　Pp.163-200.

［脚注］

ⅰ本田・大熊（1998）では、暖かい―冷たい、信頼できる―信頼できない等、セマンティックディファレンシャル法が用いられた。

ⅱSPSS15.0 BaseおよびAdvanced Modelsを用いて分析を行った。

ⅲ本田・大熊（1998）の母親像の項目には「幸福な―不幸な」も含まれ、この項目も「肝っ玉母さん」因子の負荷量が.４以上であった。